

教育センターだより

平成26年度 第10号(1月28日発行)



鳥取県教育センター 〒680-0941 鳥取市湖山町北5丁目201番地
TEL 0857-28-2321(代表) FAX 0857-28-8513
【URL】 <http://www.torikyo.ed.jp/kyoiku-c/> 【E-Mail】 kyoikucenter@pref.tottori.jp

がっこうほうもんがたけんしゅう

今年も「出かけるセンター」やっています

教育センターでは、今年度も「出かけるセンター」に取り組んでいます。
最近の2校での実績について紹介します。

【伯耆町立二部小学校】

平成26年11月27日(木)、学校の依頼により、「出かけるセンター(小学校理科の観察・実験出前講座)」を実施しました。講師は前米子市立車尾小学校長の達磨晋先生でした。

事前の打合せでは、達磨先生から、理科の授業における問題解決のプロセスや理科室の整備についてお話をいただきました。

また、学校からの「『電磁石のはたらき』の単元でキットを使用しない『ものづくり』をしたい」という希望にそって、単元構成について協議し、二極モーターを作成することにしました。

講師の達磨先生からはさらに、「単元の導入で工作用モーターを分解してみるなどの工夫をしてみると、学習内容と『ものづくり』とを関連させて教えることができるのではないか」など、授業づくりのヒントをたくさんいただきました。

評価の観点について質問に答えていただく場面もあり、「出かけるセンター」は授業に直結する研修となっています。

二部小学校の先生からも「実験の準備がしっかりできたことはたいへん勉強になりました。」との感想をいただきました。



【鳥取市立浜村小学校】

平成27年1月9日(木)、学校の依頼により、「出かけるセンター(小学校理科の観察・実験出前講座)」を実施しました。講師はセンター指導主事でした。

当日は、第5学年の単元「ふりこのきまり」に関する実験について研修しました。

研修では、「ふりこづくり」により児童が疑問をもち一往復の時間を変化させる条件について考える実験のポイント、まとめ方などを紹介し、活用に関する問題も考えていただきました。

放課後の貴重な時間でしたが、先生方には熱心に取り組んでいただき、「実験のやり方だけでなく、板書の方法やポイントも教えていただけてよかったです。授業に活かすよう、組み立てを考えたいと思います。」との感想をいただきました。



報告 1

教育センター職員研修会を実施しました

平成26年12月12日（金）、琴浦町立赤碕中学校で、宇都宮大学の松本敏教授をお招きして、教育センター職員研修会を実施しました。

当日は、赤碕中学校の先生方の第3限の授業をはじめ、第5限に行われた牧田隼教諭による第2学年数学の授業を参観させていただき、その後開催された授業研究会で松本教授が講義と指導助言をされる場所に参加させていただくという、学校での授業研究会と教育センター職員の研修会を重ね合わせた二重構造の研修会を実施させていただきました。

研修会では、松本教授による講義の内容と授業研究会での指導助言のポイントや内容を通じて、たくさんの勉強をさせていただきました。赤碕中学校が今年度の研究の指針とされている「思考の可視化」についての、松本教授による「誰に対して何を見えるようにするのか」という、本質的な内容についての考察や指摘などから、教育センターの職員一同は、業務に取り組むにあたって考えなければならないことに関する大きなヒントをいただきました。

北野校長先生をはじめとする赤碕中学校の皆さまには大変お世話になりました。ありがとうございました。

教育センター職員は日々学び続けますので、今後も教育センターの活動にご期待ください。

以下に、当日うかがった松本教授による「光るひと言」のうち、いくつかをご紹介します。

- 「これを知りたいので教えて。」と生徒に投げかけるのも、思考を促すためのひとつの方法である。
- 授業で、学級における生徒の序列を作ってしまうてはいけない。それがグループ学習の落とし穴である。
- 問いと答えをひっくり返すだけで生徒が考える教材ができる。
- 教員が入らないと会話が進まないグループ学習は、課題が悪いのではないかという視点での点検が必要である。

報告 2

土曜自主セミナー「『学び』を創る！」を開催しました

平成26年12月13日（土）、倉吉交流プラザで、前日に引き続いて宇都宮大学の松本敏教授をお招きし、標記の土曜自主セミナーを開催しました。

当日は、午前の部を「『授業力向上』相談セミナー」と銘打ち、松本教授には東部地区1小学校、中部地区1小学校からの個別相談に対応いただきました。

両校とも管理職による相談でしたが、お二人とも、厳しいご指摘をいただいたとしながらも、松本教授の丁寧な対応に大変感動されていました。

午後の部は「『学び』を創る！～子どもたちが主体となる教師の営み～」と題し、松本教授にご講義いただきました。

講義では、「次の学習指導要領はどう変わるか」、「授業と評価がどう変わるか」、「子ども主体の授業とは」、「教師はどう変わらなければならないか」という視点から、私たちの今後あるべき姿について考える機会を与えていただきました。

以下に、当日うかがった松本教授による「光るひと言」のうち、いくつかをご紹介します。

- これからの社会では、異質な他者との協働が不可欠となる。
- 学びは「何を学ぶか」から「どのように学ぶか」に変化している。
- できない子どもの屈辱をどれだけわかるかという感受性が必要である。
- これからの教師は「しなやかマインド」をもつ必要がある。「しなやかマインドセット」で、結果だけでなく努力や姿勢、成長ぶりに目を向けて「がんばったね。」とほめられ続けた子どもは難しい問題にも挑戦するようになる。そして社会に出て人間関係で問題が生じて、徒に相手のせいにするのではなく、相互の関係を問題として解決の方法を模索するようになる。

なお、松本教授は平成19年度から21年度にかけて中部教育局が取り組んだ授業力向上に向けた事業でも来県され、ご講演くださいました。講演内容のまとめは中部教育局ホームページの「学校教育担当」→「授業力向上事業」→「講演会記録」に掲載されています。「光るひと言」満載の講演記録です。



【土曜自主セミナーの様子】

きくんのワンポイントアドバイス



教育センター・共同研究

～学級集団の絆を太くする仲間づくり～

1 支え合い認め合う仲間になるためには？

問題行動（不登校、いじめ等）の未然防止には認め支え合う仲間づくりが有効であるといわれています。発達心理学では、子どもが他者を支え認め合う行動を獲得するには、「自分のしたことが他者に認められること」（承認欲求の充足）が必要といわれています。

教育相談課では今年度、鳥取市内の協力校にお願いし、児童生徒が他者を認めること（感謝すること）ができる教材「ありがとうカード」を通して、学級集団での絆づくりについて研究しています。

2 “互いに感謝する”教材と効果測定アンケート

児童生徒が自らの言葉で感謝の意を伝えることは時間がかかります。資料①の「ありがとうカード」（右図）は学級の係・当番活動に対する感謝や評価の言葉をあらかじめ掲載してあるので、○で囲むだけで謝意を伝えることができます。カード交換の際に、○で選んだ理由も伝えとさらに感謝の気持ちが伝わります。カードの交換は月に1回から2回実施していただきました。

効果測定のためのアンケートは、次の2点を問う項目で構成されています。「仕事得点」（自分の学級での仕事に関し、感謝してもらったと感じているかを問う）、「絆得点」（学級について居心地のよさを感じているかを問う）。

この2つの得点で散布図（例：右下図）を作成し、仕事を認められることと学級の居心地の関係を調べました。

資料①

○年○組のためにありがとう！！

_____さんは、_____のしごとを
がんばってくれています。

あなたがしごとをする時は・・・

一生けんめいです	工夫しています
みんなのことを考えています	最後まで取り組んでいます
ていねいです	思いやりがあります
みんなと協力しています	まじめです
自分から取り組んでいます	責任感があります

※2つ○でかこみましよう。

ありがとうございます！！ _____より

3 結果と考察

カード交換の回数とグラフの4つのグループ（右上、右下、左上、左下）にプロットされた人数の相関を調べたところ、カード交換の回数が多いほど、右下のグループの人数が少なくなることがわかりました。

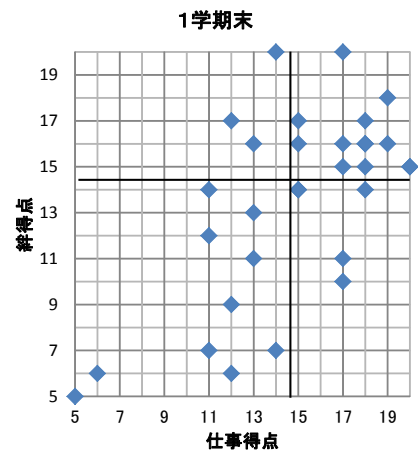
これは、学級の仕事を感謝されることが増えるほど、学級の居心地が悪いと感じる児童が少なくなることを表していると考えられます。

この研究に協力してくださった先生方の感想を掲載し、謝意とさせていただきます。

- ・友だちに認められる機会となり、皆が楽しみにしている。
- ・学級全体があたたかい雰囲気になる。
- ・「ありがとう」を伝えにくい異性に対しても、想いが伝えられるのがよい。
- ・選択式なので短時間で実施できる。

ご協力くださった児童生徒の皆さん、先生方、ありがとうございました。

この共同研究については、平成27年2月13日（金）に教育センターで開催する「鳥取県教育センター研究発表会」において、もっと詳しい内容を発表しますので、ぜひ多くの方がご来場くださるよう、お待ちしております。



平成19年度のことだから少し古い話になるが、当時園田女子中学校・高等学校の校長であり、園田女子大学教授でもあった野口克海氏の講話で聞いた話である。

*

校長として、新規に採用される教員の授業を参観して指導する。参観してみると皆、まずまずの内容で授業をしている。

そのことを誉めたあと、「ただし、あなたの授業は扇型の授業だ。つまり、『Aさんどうですか。はいそうですね。次にBさんどうですか。はいそうですね。でもここはどうですか。そうですね。ではCさんどうでしょう。』と、教員を要とした扇型のやりとりに終始している。できれば、Aさんの発言に教室中の生徒が反応し、次から次へと発言が引き出されるような、いわばダイヤモンドが輝くような授業になるのが望ましい。」と指摘する。

そして、「それでは先輩の先生方がどんな授業をしているか一緒に見に行きましょう。」ということで連れだってベテラン教員の授業を見に行く。すると、そこでは流れ星型の授業が行われていたという。つまり、教員の話す言葉は生徒の頭のはるか上を虚しく飛び去り、教室の後ろの壁の手前あたりでひっそりと消えていたという説明だった。

*

聴く者を笑わせるのにも長けた方であった。しかも、その笑いの中に、考えさせられる真理が含まれているところが何とも言えず心にくい。扇型とダイヤモンド型と流れ星型と。他にも型はありそうだが、確かにどこかにありそうな授業のスタイルがうまく言い当てられている。

昨今、教育界では「新しい学び」「アクティブラーニング」ということが言われる。今思うと氏は、少なくとも平成19年度にはすでにいわゆるアクティブラーニングについて指導、推奨しておられたことになる。

*

かつての自分自身を思い起こしてみると、楽しく賑やかな授業をしたいのだが、隣の教室に迷惑にならないだろうかとか、その後の自身の授業における学習規範が崩壊してしまっただけで困る、などと考えて、賑やかな授業にすることは心理的歯止めがかかっていた。

しかし、昨年12月5日（金）に開催された鳥取西高等学校の公開授業研究会に参加したとき、公民の授業をなさった先生が、「賑やかになってもかまわないのでこのテーマについてみんなで話し合ってください」と発言された。折しも学校は大きな工事中で、コンクリートを壊す掘削機の音が響く中での授業だった。それでも生徒は集中して授業を受けていた。

*

「新しい学び」「アクティブラーニング」が時代の要請であるのなら、学校全体でそれに取り組むための共通理解が必要だと思う。

授業中に机や椅子を動かす音が聞こえても、隣の教室がどんなに賑やかな授業を行っても、それぞれの教室の授業ごとに児童生徒が集中していれば問題はないという共通理解が必要なのだと思う。

まずは教職員の間で、新しい学びについてのアクティブラーニングを行う必要があるのだと思う。

